
ドジなピエロの舞台裏

佐佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドジなピエロの舞台裏

【コード】

N7035S

【作者名】

佐佑

【あらすじ】

とある港町に、ある日王子がお忍びで訪れる。彼の目的は一体？

前篇（前書き）

この話は前作「ドジなピエロ」読了後に読むことを推奨します。長くなりましただので二部に分けました。

前篇

こんにちは皆さん！僕はこの国の王子でシャルル。今僕はとある港町に来ているんだ。初めて来るこの町では野菜や果物より魚介類が多い市場や時々風に運ばれてくる潮の匂いがとても新鮮だと思う。僕の育った町に海はないからね。

人々も城下町の人と同じくらい明るいし、正直なところもう三、四日滞在していたいくらいだ。でも王子という立場上あまり長居ができないのが残念。特に今回はいわゆるお忍びという形の外出なのでなおさら。という訳で、やって来ました目的の館！僕はここの娘さんに会うために今日出かけてきたのです。

深呼吸を一つして大きな扉をノックするとすぐに一人の女の子が出てきた。肩口で綺麗に切り揃えられた黒い髪と灰色の瞳を持つ彼女は、僕の目にはとても知的で落ち着いた感じに見えた。僕と同じ十五歳という割にはかなり大人びても見えた。

「連絡も入れずにごめんなさい。僕はシャルル、あなたの婚約者になつた男です！」

僕は勢いよくお辞儀をした。頭をあげると彼女は驚き、そして困っているようだった。やっぱり一通ぐらいは手紙を書いておくべきだったかなと僕が反省していると彼女が口を開いた。

「あなた様の婚約者になられた女性は現在外出中でございます」

僕らの間を一陣の風が吹いていきた。春の南風が南極からの風に感じられたのは一体どうしてなんだろう？

「すみません、この程度のおもてなししかできなくて」

「いえいえ、さつきまでこちらの訪問を知らなかったとは思えないほどの働きぶりですよ」

客間に通された僕は、そう言ってカップの中のお茶を飲んだ。さすが貿易商の家だけあって、お茶もお菓子も外国産のものが揃って

いる。物珍しさのあまり、ついつい遠慮を忘れてしまう。

ちなみにこちらの彼女はクロエさん。この家のメイドの一人なのだそう。お嬢様とは暇さえあれば一緒にチエスをしたり本を貸し借りしあったり、私的な用でもよくお供しているらしい。ちなみに年はお嬢様（僕）の三歳上だとか。大人びてるわけだ。

「リス様は、あ、これは私が勝手に呼びしているだけなので。エリーゼ・ベルナルお嬢様は本日夜八時ごろご帰宅なさる予定です」
「八時!? ごめんなさい、そこまでは無理です。夜七時にはここを出発するようにと父に言われているので……。ところでエリーゼさんはそんな遅い時間まで一体何を？」

「そうですね。今日はピアノとフェンシングのお稽古と語学の勉強を」

「それは午後だけの予定ですか？」

「はい」

「ちよつとハードすぎませんか？」

「私もそう思います。リス様は……。今はどう思われているのか」
「今は？」

「ただ、稽古を取りやめることはできませんが見学することならできると思われます。稽古場の隣に見学用の部屋があるのです。それで構いませんか？」

「はい、僕は元々彼女の様子を見に来たので」

という訳で僕らは一歩、彼女のいる稽古場に向かったのだった。

僕らは見学用の部屋に入った。空いている席についてガラス越しの隣の部屋を見る。そこには十人前後の、僕と年代の女の子たちがいた。彼女たちは慣れているのかこちらを特に気にする様子もない。

「ではこの曲を、ミス・ベルナルに弾いてもらいましょう」

「はい」

教師に名指しされて立ち上がったのはスラリとした少女だった。

明るい茶色の髪とエメラルドのような瞳、それに白い肌を持つ少女だった。

「人形みたいな子だなあ」

僕は思わず声を出していた。

彼女が椅子に腰かける。細い指が鍵盤に触れる。一拍置いた後その十指が駆け出すように動いた。とてもテンポの速い曲を彼女は正確な音で奏でる。よく聞けばそれは前にも聞いたことのある曲だった。でもその時のピアノリストでさえあまりの複雑さに一、二か所間違えていた。彼女はそこもなんでもないように弾いていた。

「素晴らしい・・・！」

「今すぐピアノリストになつていいくらいだ」

見学室にいた、少女たちの保護者と思しき人々が僕の気持ちを代弁してくれた。彼女を指名した教師にさえ驚いた様子が少し見える。少女たちの方では、彼女の技巧に驚いた様子を見せる子もいれば彼女の演奏に聞き惚れているような様子の子もいた。僕の隣に座るクロエさんは彼女を見守るように優しく微笑む。そして当のエリィゼさん本人はとうとうと眉一つ動かさず無表情のままだった。

「王子、そろそろ時間です」

「分かったよ。じゃあクロエさん、行きましょう」

「はい」

僕らを乗せて馬車は走る。宮殿に帰るためじゃない。まず僕に付き添ってくれたクロエさんを屋敷に帰るのが先だ。

「いかがでしたか、リス様のご様子は？」

「いやあ、とてもしつかりしているなあって思いました。それに男の目から見てもカッコいい人だ。ピアノは上手いし、外国語の会話は現地の人のように流暢。それにフェンシングの姿なんて凛々しかったですよ。あれは僕もやったことがあるんですけど、突きを出す度に剣がどっかに飛んじやって」

「左様でございますか」

クロエさんは僕から顔をそらし窓の方を見た。その肩が震えている。あ、笑ってるなこの人。

「まあ、しいて気になることを言うなら、彼女、何をやっているときも全然楽しくなさそうに見えるんですよ。何ていうか・・・その・・・」

「人形のように、と仰りたいのですか？」

クロエさんは落ち着いた様子で再び僕を見た。外面的ならともかく内面的な意味でその比喩を使うのは「エリーゼさんと仲が良いという彼女の前では特に やっぱり失礼な気がして僕は曖昧にうなずいた。しかし彼女はそれを特に気にする様子もなく語りだした。

「正直な話、私から見たここ数年のリズ様は自ら人形であろうとしているように思われます」

「え？一体何のために？」

「おそらく、いいえ、ほとんど旦那様のためでしょう。あのお方は良家の娘はこうであるべきという高い理想をお持ちでいらっしやいます。リズ様の意見を、私の知る限りでは、聞いたためしなど一度もありません」

「・・・」

「それでリズ様は旦那様に言われたことをただ黙々とこなすようになられました。あの方は全てを諦めてしまったのです。自由な時間、自由な恋、そして家族との絆を」

「あつ、そう言えばベルナル家のお方様は？彼女は何も言わないんですか？」

「奥様は数年前、家を出て行かれました」

「出て行った!？」

「はい、『もう、あなたにはついていけない』というたったそれだけの手紙を残して。リズ様を置いて。かつてはよく二人でサーカスに行ったりしていたものですが」

「そうだったんですか・・・何か訊いちゃいけないようなこと訊いてしまったみたいですね」

「ご心配なく。責があるとしたらそれは話した私にあります」

その時ベルの音が聞こえた。目的地に着いたとき鳴らすようにと、馱者に持たせたベルの音だ。

「ミス・クロエ。屋敷に到着しましたよ」

「ありがとうございます、馱者さん。それではシャルル王子様、私は本日はここで失礼します」

「はい、今日は色々ありがとうございます」

一人になった馬車の中、僕は彼女の顔を思い浮かべた。

エリーゼ・ベルナル。まるで人形のような少女。それでもクロエさんと過ごすときは年相応に笑ったりするらしいからそこまで言うこともないのかもしれない。それでも、

「僕も見たいなあ、彼女の笑った顔」

カーテンを開けて外を見る。ベルナル家の屋敷はすっかり見えなくなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7035s/>

ドジなピエロの舞台裏

2011年4月24日09時25分発行